

宮古島市における宮古上布の藍染料に関する利用状況について

大湾 ゆかり*

About the use of indigo dye in Miyako-jofu in Miyakojima City

Yukari OWAN*

はじめに

宮古島の「宮古上布」は、苧麻（和名：カラムシ）の茎から採取した繊維を苧麻績み（ブーンミ）という高度な糸づくりの技術によって極細の糸に製し、緋文様を括った上で十数回も藍で染めて織られる紺細上布である。宮古上布にとって無くてはならない苧麻と琉球藍、この二つの材料が揃い、幾つもの作業工程を経てようやく、薄くて艶やかで深い藍地に繊細な緋文様が浮かび上がる上布ができあがる。

宮古上布は重要無形文化財に指定された織物で、指定要件のひとつに「藍染め」がある。2019年に筆者は、令和2年度博物館企画展「沖縄の藍」の中で宮古上布の藍染めを紹介するため、市内3カ所の事業所を訪れたことがある。今回の総合調査では5年前に訪問できなかった所を含めて、宮古上布に用いる藍染料の利用状況を軸に聞き取り調査を行った。また調査した工房では皆さん宮古上布が直面している苧麻糸の不足を問題視していたので、それについても若干触れて報告したいと思う。

1 宮古上布の歴史と藍について

宮古上布は、1583年（尚永11）に頭職下地の妻・稲石が王府に献上した19算の上布綾錆布が創製だといわれている。薩摩侵攻後、1637年（尚豊17）には先島諸島に人头税が布石され、宮古島では紺上

布を含む宮古上布が薩摩への上納品に定められ物納が始まった。宮古上布は「薩摩上布」として薩摩藩の財政収入になったため品質検査は厳格を究め、村番所に設けられた機座で役人の厳しい指揮監督のもと過酷な労働で生産されたという¹。

明治に入っても続いた人头税は、1903年（明治36）にようやく廃止され、これにより宮古上布の自主生産の道が開かれた。生産者らは自ら宮古郡織物組合を組織して品質保持につとめた。また明治末期から大正にかけて高機や奄美大島の締機による緋技術の導入等で最盛期を迎え、年間約18,000反の生産を誇った²。

戦後は1946年に宮古織物業組合が設立して生産を再開したが、社会情勢の変化や原料の苧麻不足により生産量は落ち込んだ。1952年（昭和27）の2064反をピークに減少を続け、伝統的工芸品宮古上布の生産は平成には200反、さらに令和になってからは10反ほどに減少している³。

宮古上布で用いる藍染料について、18～19世紀の史料である『與世山親方宮古島規模帳』や『球陽』⁴には、番所の囲いの中で真苧と唐藍を作らせたこと、百姓を監督指導する役人の心得や出来高の報告、生産高を伸ばした村役人の表彰等に関する記録等がみられる。唐藍とはキツネノマゴ科のリウウキュウアイのことで、国頭の藍に頼らず宮古・八重山でも栽培するよう奨励された時期があったことが伺える。つまり、宮古上布は琉球王国時代からリュ

* 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館
Okinawa Prefectural Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, JAPAN

ウキュウアイを加工した染料（以下「琉球藍」という）で染めていたわけである。

一方、宮古上布には宮古特有の方法としてタデ科の藍から作った薬藍（宮古ではビキーアイ）を琉球藍（宮古ではミーアイ）と混ぜて使う藍染め法がある。これについて、1918年（大正7）の琉球新報に宮古上布は「宮古特有の蓼藍と泥藍とを使用し琉球紺より堅牢と称せられ（後略）」⁵とあり、統計資料⁶には1922年（大正11）から薬藍の生産が、1927年（昭和2）から薬と藍玉の製藍が記載され始めているので、少なくとも大正時代には両方の藍を使用していたことがわかる。

現在、宮古島でリュウキュウアイの栽培農家があるかは定かでないが、今回訪ねた事業所ではほぼ沖縄島北部で生産された琉球藍を使用していた。しかし中には八重山地方から移植したマメ科の藍（ナンバンコマツナギやタイワンコマツナギ）を栽培して沈殿藍を作っている所もある。また、現在もタデアイから薬状の藍を作り、これを琉球藍に混ぜて使っている。

2 調査の概要

調査は、2024年11月18日から20日の3日間、宮古島市の5カ所の事業所を訪ねて聞き取り形式で行った。調査地は、工房相思樹、宮古島市伝統工芸品センター、福樹工房、宮古芋工房、下地工房である。調査では、各工房で用いている藍染料の種類、使用量、入手経路、藍建ての方法、染料の品質等に関する意見や課題を中心に聞き取りし、またリュウキュウアイとは別の含藍植物であるナンバンコマツナギ等を栽培している工房では、畑にもご案内いただき栽培状況等を確認した。そのほか、宮古上布の喫緊の課題である芋麻糸不足の問題をはじめ、宮古上布を支えてこられた染織家の皆さんの制作にかかる熱意や後継者育成の現状についてもお話を伺った。

3 藍染料の利用状況（聞き取り調査から）

(1) 工房相思樹

工房相思樹を主宰するのは、宮古上布の染織作家である砂川美恵子氏である。砂川氏は個人でナンバ

ンコマツナギとタイワンコマツナギ（以下「インド藍」という）を栽培し、自ら沈殿藍を製造している。そして自作の藍染料で糸を染めて宮古上布を織っている。工房相思樹では2019年に訪ねてから5年が経ち、製藍でアイ葉を漬け込む容器が大きいものに新調され、攪拌用に水中ポンプを導入するなど道具が変化していた。

砂川氏の畑は宮古島市総合博物館の近くにある。藍畑の面積は約100坪で、インド藍2種を栽培している。毎年2月に種を採取して植付ける。植付けは、畑に畝を作った上に穴を掘って種をまき軽く土で覆う。するとすぐに芽が出るそうである。肥料は入れないが、雑草は毎朝こまめにとっているようで、ネット等はかけない。一度植付けした株は3～5年間利用するが、5年経つと色素がなくなるので植え替える。収穫は年に大体4回で、長雨が続いたら1カ



浸漬用の容器(手前)と砂川氏



沈殿藍



モクマオウの灰汁



インド藍の畑

月に1回は収穫できる。11月～2月は寒くなるため藍が生長しないので収穫しないそうである。

アイ葉の収穫と製藍作業は、現在は5～6人で行っている。収穫したアイ葉は、350ℓ入る頑丈なプラスチック製容器の8分目まで入れ、水をひたひたになるように注ぎ、その上に板を敷きブロックを積んで抑える。雨除けのベニヤを載せて約2日間

発酵させる。液が薄い緑色になり、紺色の泡が出て葉が浮いてくる状態を見て判断し、アイ葉を取り去る。葉っぱの滓は畑の肥料にする。つぎに藍液に消石灰を入れて攪拌する。消石灰はサトウキビに使う食品添加物として売っているものを使い、40ℓに対して150g入れる。攪拌は、以前は手動あるいは洗濯機を使っていたが、現在は水中ポンプを導入している。攪拌は2～3時間行うそうである。攪拌の後1日置いて、上澄み液を灯油用の手動ポンプで吸い上げる。藍液の量200ℓに対して20ℓ（歩留まり10%）の沈殿藍ができるという。こうして製藍した藍は別の容器に移して貯めておき、藍染めの前に藍建てする。

藍建ては沈殿藍を藍甕に仕込み、灰汁と泡盛と黒砂糖を入れて攪拌する。前々から灰汁建てを行っていたとのこと、現在は佐良浜の鯉節工場から入手したモクマオウの白い灰を使って灰汁を作り使用している。灰汁で建てると色落ちしないという。pHは12になったら水で薄めて11.8位にする。沈殿藍10ℓに対して灰汁30ℓほど入れ、泡盛、黒砂糖を入れる。染液は凡そ40ℓ位である。

砂川氏が使用している染料は、藍以外にもフクギやシャリンバイ等があり、色彩ゆたかな作品を制作している。インド藍で染めたものは、琉球藍に比べて黒っぽくなるとのことだが、扱いやすいのでインド藍を使っているそうである。

(2) 宮古島市伝統工芸品センター (宮古織物事業協同組合)

宮古島市伝統工芸品センターは、1976年に建設された宮古伝統工芸センターが2014年に移設されたもので、宮古織物事業協同組合（以下「組合」という）が管理運営している。宮古上布の展示・物販等のほか、組合の織手養成室や藍染室、洗濯・砧打ち等の作業室が併設されている。今回は組合の理事である浦崎美由希氏と岩本大輔氏、さらにセンター内で藍染め作業を専門に行っている下里愛子氏にお話を伺い、作業の様子を見学した。

まず組合では、藍染料は本部町等の製造所から購入した琉球藍を使っている。現在は伊野波製造所の藍に加え、本部町の藍ぬ葉あ農場（池原藍）、比嘉製造所、名護市の仲西製造所から沈殿藍を取り寄せ

ている。藍の品質は製造所によって差があるそうである。消石灰が強い藍はアク抜き（石灰分を抜く）するのが難しく、藍建てに時間を要するが、染色の際は日持ちがするし攪拌すれば再び染められるようになる。藍は各々性質が異なるため維持するのも難しいらしい。現在は先下染めと仕上げで染め分けているそうである。

藍建ては45ℓのポリバケツに1袋10kgの琉球藍を使っている。現在はモクマオウの灰で灰汁を作り、泡盛と多良間産の黒砂糖を入れている。pHは11.4～11.6位になるようにしている。

琉球藍は10kg入りを年間20袋ほど使う。下里氏は藍染場の裏庭でタデアイも栽培している。タデアイは乾かした葉っぱに水を振って発酵させ染液にし、琉球藍の助剤として使う。糸を染める回数は経糸と緯糸、緋括りの締め機用の糸をそれぞれ20回程度で、どの藍に入れたか逐次メモして札を付けて



藍建てした藍



苧麻糸の藍染め



緯糸を染めている途中



緋むしろの染め途中



糸染めの乾燥



発酵させたタデアイ

いる。藍建ては、日々藍の表情が異なるため、毎日攪拌して状態をみているようで、管理が難しいとのことであった。現在新しい研修生が加わり主に2人で染めを担当している。

センターではまた敷地内の畑でインド藍を育てており、訪問した日には岩本氏が丁度製藍作業を行っていた。120ℓの容器3個でアイ葉を発酵させ、アイ葉を取り除いた後は攪拌用の別の容器に移し40ℓに対して150gの割合で石灰を投入し、水中ポンプで約2時間攪拌しているとのこと。その液の5%くらいの沈殿藍ができるそうである。

(3) 福樹工房

福樹工房を主宰する神里佐千子氏は、宮古島市織物事業協同組合の理事でもあり、宮古島市伝統工芸センターでも作業指導を行っている。自宅に工房を構えて染めから織りまで一貫して行うとともに、苧麻やインド藍の栽培も行っている。

神里氏がこれまで使っていたことがあるのは、伊野波製造所（伊野波藍）、藍ぬ葉^あ農場（池原藍）、比嘉製造所、仲西製造所、山藍工房の藍で、藍建ての手本は、小橋川順市著の『沖縄 島々の藍と染色』である。

藍建てには伊野波藍と池原藍を混ぜて使っていた。最初に伊野波藍をアク抜きし、建てられるようになった段階でpHを見ながら池原藍を混入するそうである。

藍ぬ葉^あ農場では藍建てにフスマを入れると聞いたが、宮古では元からフスマは使わないので今まで通りのやり方で伊野波藍をゆっくり建てて、池原藍は早く建つので最後の仕上げに使っているとのこと。それぞれの藍を比べると、伊野波藍は石灰分が多いので藍建てには時間がかかるが長持ちする。逆に池原藍や比嘉藍は石灰分が少ないのでアク抜きをしないでいいが、早く建てて長持ちせず伊野波藍に比べて匂いがするという。琉球藍もアイ葉を育ててくれる農家がいなくてできないが、利益がないと農家もやらないだろうし問題であると心配されていた。

また中国の視察旅行で、藍染め後の染液を長持ちさせるのに藍の原液をどんぶり一杯加えて攪拌していたのを見て、組合でもやってみたとところ5年く



沈殿藍



藍建てした藍



インド藍の畑



苧麻畑

らい同じ藍を維持しているという。

神里氏には自宅の藍甕を見せていただき、また郊外にある苧麻とインド藍を栽培している畑を案内してもらった。畑の見学時に別の調査員も来ていたので話を聞くと、近年苧麻の茎に斑点が表れ、苧麻績みするときその部分から切れやすくなっているという。その原因を調査するため葉っぱや土などを採取していたのでその作業も見学した。畑の面積は約300坪で、防風林に囲われている。畝が全部で10列ほどあり、列ごとに違う品種の植物を植えている。苧麻にはアオブーとアカブーと呼ばれる品種があり、それぞれの列に真っ直ぐ伸びていたが冬場は収穫しないとのことであった。因みにアオブーは繊維が柔らかく、アカブーは強くて毛羽が少ない品種である。苧麻の隣の畝にはインド藍が植付られ、これを収穫して製藍するとのことであった。

(4) 宮古苧工房

宮古苧工房は、宮古上布保持団体代表の新里玲子氏の工房である。新里氏は、宮古上布の伝統を踏まえつつ藍色だけでなくカラフルで個性豊かな宮古上布を制作している。一方、上布を広める活動や後継者育成等にも力を入れている。新里氏の情熱あふれる語り口や、糸を大切に思い残糸も加工してアクセサリ販売するなどの手腕にも感銘を受けた。

現在、新里氏が使う藍染料は、主に本部町から取り寄せている。年間通して染液の濃い藍と薄い藍を2つ用意している。2カ月前に仕込んだ藍は池原藍で、2日後に灰汁を入れ泡盛を入れたら3日で藍華が現れた。それでも10日～2週間は待つて十分発酵させてから染めている。そうしないと色が濃く染まらないし色に艶がないそうである。元々は苛性ソーダで建てていたが、約15年前の御絵図の復元で黒藍を目指したとき、イスノキを燃やした灰で作った灰汁を使ったら、いくらでも染まるほど力があり、それ以来灰汁のみで藍建てを行い、苛性ソーダは発酵が進みにくい時の助剤として使っている。しかし、先輩方は苛性ソーダだけで宮古上布特有の色を出していたので、保持団では先輩の技を学び、灰汁建ては自分の家で試すようにしている。

新里氏の織糸は経糸が双糸、緯糸が単糸で、撚りは緩いので色が入りやすいそうである。宮古島では何回も重ねて染めるのは撚りに関係があるという。撚りが強いと染まったかにも見えても砧打ちすると繊維が割れるからムラができる。中まで染み込むよう濃く染めるのは色ムラを防ぐ策で、黒く染めるのは難しいけど癖が出にくい。一反分染めるときは、色素の薄い藍で染めてから色素の濃い藍で染める。濃い藍は1回で染まったように見えても中まで浸透していないので、何回も染める方が良いとのことであった。

藍は年間10kgを5袋使う。保持団で一緒に取ることも直接注文することもあり、最近は組合でも池原藍を使うので、それ以外の藍も購入している。要は藍建てのとき、それぞれの特性に応じて使い分けるのが良いと考えているそうである。琉球藍の保存会から保持団に送られてくる藍は、保持団が作業日誌をつけて、その情報を返すようにしている。

宮古では、以前は70ℓの容器に2袋(20kg)を入れるのが常識となっていたが、藍ぬ葉^あ農場の藍建てをみて現在は60ℓに10kgの藍を入れている。また、色素が少なくなったら濃度の濃い藍に移し入れて使っている。普通は藍建て時にpHは測っていないが、発酵しにくい時や急ぎの時には測っている。pHは11くらいで宮古ではやや高めが良いとされる。水は硬水を使っている。軟水や水道水のカルキ抜きした水を使うように言われているが、発酵して染ま

るのでとくに変えていない。

琉球藍の品質については、以前使っていた伊野波藍は3日間放置しても攪拌したらすぐ息を吹き返したが、池原藍は消石灰が少ないので腐れやすく、2日間放置したら藍の元気もなくなり一週間経ったら真っ白なカビが生えたこともあった。最近は石灰分の高い沈殿藍のアク抜きが言われるが、以前はアク抜きという言葉も作業もなかった。若い世代が書物等で学んでアク抜きするようになったが、新里氏は「宮古は宮古流でいい。大学の先生に宮古はpHが高すぎると言われたが、先輩方もこれで十分に発酵させていい色を出しているの、pHは高めだが十分に発酵させることが大事」だと考えているそうである。とくに黒く染めるときは、十二分に発酵していないと染まらないので、発酵に4～5ヵ月かかる前提で仕込んでいる。急ぎの場合は池原藍を使うけど、それでもじっくり発酵させる。そうすることで艶感も違うそうである。また新里氏は、制作した全ての作品について糸(誰々の糸で何算何g、撚りの強さ等)や染めの情報から感想までノートに付けており、藍の発酵が遅い時にはその記録に助けられるそうである。

今回、新里氏から、①藍で染めた布は堅牢度があるのか、②黒朝の黒は本当に藍染めだけなのか、タンニン系の染料や墨を入れていないか、③台風が



藍建てした藍



制作した作品



苧麻糸の拵括り



藍染めした括り糸

接近すると藍建ての発酵が進むか、という3つの疑問について検証してほしいとの要望があった。また宮古では藍染めの反物の汚れを落とすとき、ヤブニッケイ（タンニン系）を入れて煮込むそうで、これは色止めと発色に関係しているのではないかと考えている。

新里氏はいろんな色を染めているが、ベースは全て藍で、年中藍を使っている。一番好きな色は緑色で、緑は藍が闇、黄色が光で両極端を持ち合わせている。染料は藍とフクギであったが、最近フクギの代わりにエンジュが多いそうである。

(5) 下地工房

最後に、宮古上布の唯一の紺締め職人である下地達雄氏の工房を訪ねて紺十字紺宮古上布についてのお話を伺った。十字紺は大変細かい文様なので、予め締め機にかけて織る。その第一人者である下地氏は組合と自宅で紺締めを行っているが、現在は苧麻糸が少なくてここ数年間8反前後しかできないという。今回は藍染めの話を聞きに行ったが、それ以上に糸の問題の深刻さを痛感した。しかし、ここではまず藍染料についての話を報告する。

下地氏によると昔の藍と今の藍とは全然違うという。伊野波藍が芭蕉の葉っぱに包まれて竹籠に入れて出荷されていた頃、これを購入して藍甕に入れたら自然に発酵したそうである。今の藍は藍分が少なく、同じ20kg中の葉っぱの量も少ないのではないかと疑問視している。昔の藍は甕の底に溜まったが、今は沈殿もしない。竹籠の時も肥料袋の時も変わらず水が抜けて硬かったが、現在の藍は缶に入ってくるので水が抜けない。それで今は使わなくなったそうである。

かつて藍建ては苛性ソーダを使っていた。灰汁もあるが発酵が遅いので好みでないとのこと。みんなそれぞれのやり方があると。藍建ての方法は65ℓのポリバケツに1袋（20kg）の藍を入れ、苛性ソーダ250g～300gと蜂蜜、泡盛を入れた。これまで藍染めの作業を30年～40年は行っていた。

染める時は、1回で染めるより、先に下染めをして徐々に濃い色にする。初めから濃い藍で染めると中まで染めきることができない。昔は1年に1回は藍を全部入れ替えていた。毎年新しい藍を仕込んで、

染まらなくなったら捨てる。それだけ染める量があり、新鮮な藍にしなければ濃い色は染まらない。あまり染まらない悪い藍で何回も染めると紺が薄くなるので、弱い藍で地糸を2回染めた後で新しい藍で染めていた。藍の調子によって全部で10回～12、13回染めたそうである。



藍建てした藍



紺むしろ



苧麻績み



締め機

4 宮古上布の現状

下地氏によると、現在手績みの伝統的工艺品宮古上布（紺十字紺）は年間8反前後で、紡績苧麻の織物である宮古麻織でも15反くらいしかないそうである。そのため藍染めも15～16反である。下地氏がこの職についたのは昭和30年代前半で、自分が習っていた頃は800反～1000反はあったそうだが、平成になって100反を切り、令和には10反以下になり、現在8反前後しかない。それは昭和初期から苧麻績みをしていきた熟練者が昭和の終わり頃から高齢化して、検査規格に求められる細い糸を績める人が減少したためだという。それでもやや太くてもその糸は工艺品指定の宮古上布に使うことができ、さらに太い糸は帯用に使えるのだが、それらの糸も不足している。現在、宮古島の十数カ所で苧麻績みの講習がなされているが、このままでは糸は増えないのが現状だという。下地氏は、早く別の

方策を講じないと宮古上布の生産はますます厳しい状況になると苦言を呈した。

下地氏曰く、「自分の職業はデザインだから織物がなければ仕事はない。自分は密度のあるものが主体で、非常に細かい緋が作れるし作りたいが、糸がない。宮古では糸以外に欲しいものは一つもない。宮古上布を買う人はいっぱいいるが、糸がないから作るうにも作れない。糸さえあれば、宮古上布は生産できるし販売もできる。65年やっているけど、今みたいな状態が一番最低。でも絶対失くしてほしくない」と。下地氏は締めの仕事がないので、糸が足りない人のために少しでも苧を績んで糸を作っている。下地氏の母・下地ミツ氏は95歳まで工芸品指定される上布を織っていたそうで、戦前生まれの世代の人びとが戦後も宮古上布の生産を支えてきたという。

下地氏はまた、糸を求めて韓国の糸を試したが繊維が硬くて使えず、平成の初め頃には自費で中国広東省に出かけて現地の人に糸づくりを教えたが、そこも湿度が低くて糸が硬くなるので向かないなど、外地での糸についても検討したことがあるが、その確保は難しいとのことであった。

一方、宮古苧工房の新里氏は、毎月糸の生産量や価格等をノートに付けいわゆる「糸帳」を作っている。それによると、2000年を境に糸の生産は下り坂で、とりわけコロナ後から急激に減ったそうである。その要因は大正生まれ世代の人々が減少したことによる。それでも90代になる方々が糸績みは視力が衰えても手が覚えているからと苧麻を績み、その糸は太くても活用できるので本当にありがたいと言っていた。この世代の人々は小さい時から糸績みを手伝っていたけれども、戦後生まれの人たちにはその技術は受け継がれていない。傍で見て育っても自分がやるものだとは思ってなかったからだという。それでも今まで全くその環境がなかった人に比べると宮古の人は糸に関心を持ちやすいので、日常の暮らしの中に糸績みや織りの風景があることが伝統を伝える方策につながると話された。

神里氏からは、苧麻績み保存会だけだと糸が手に入らない現状を教えてくれた。苧麻績みは時間を要する技術で、覚えるだけでも難しいがそれを続けていくのはもっと大変である。2003年に宮古苧麻績

み保存会が国選定保存技術の保存会になり、国の助成で3年間給金をもらいながら研修する制度があり、神里氏は現在4名の研修生を受け持っている。研修生は3年間で卒業すると4年目から10算の糸を作る課題があり、これをクリアしないと手当が出ない。そのため研修を受けても辞めてしまう人も多いとのこと。こうした教室は18カ所ほどあり、各教室3名から5～6名、7～8名などである。それ以外に組合でも研修しており、また研修を終えた人達が仲間を募って苧麻績み作業を継続している所もあるそうである。

このように宮古上布の現状として苧麻糸の確保が喫緊の課題であり、そのために何とか効果のある方策を立てなければならないことを今回の調査を通して教えてもらった。「糸がなければ染も織もできない」という悲痛な声を間近に聞いたので一部紹介した。

5 考察

宮古上布に利用されている藍染料については、概ね本部町で生産されている琉球藍が使用されていた。以前は伊野波製造所の藍が主流であったが、現在は琉球藍製造技術保存会に所属する製造者から購入している例がほとんどであった。ほかに宮古島では複数の場所でインド藍を栽培していることも確認できた。インド藍の製藍方法は琉球藍とほぼ同じであるが、容器は120ℓ程度と少量であることや、個人での商品に限られること、また投入する石灰量は砂川氏の方法を基準に行われていることもわかった。

さらに、製藍する道具も水中ポンプ、浸漬用の容器等は池原氏からのアドバイスによるところが大きく替わっていた。また藍建てにおいては、ほぼ全事業所で元々使っていた苛性ソーダから灰汁建てに切り替わっていた。

琉球藍の品質についてはお話を聞いた皆さんから共通して、製造所によって藍の性質が違うことが指摘された。伊野波藍は消石灰分が多いように思われるのに対して、池原藍や比嘉藍は比較的消石灰が少ないという印象が強いようである。消石灰が強い藍はアク抜きが必要で、発酵しにくい腐れにくい特

徴があるのに対し、消石灰が少ない藍は発酵しやすいが腐れやすいということのようだ。弱すぎる藍も中にはあり消石灰分をもう少し強くしてほしいとの声も聞こえた。

藍建ての方法は、概ね木灰汁に泡盛と甘味料（黒砂糖や蜂蜜）を入れて攪拌している。染めは初めに藍の力が弱い液で数回染め、それから力の強い藍で染め回数を重ねるのが良いとのことであった。これは糸の中まで染料が染み込んで砧打ちや洗濯でも藍の地色がムラにならない均一な濃紺を染めるためである。また、藍の染液のpHは11～12という風にアルカリ性が強い状態で染めていることや、60ℓのポリバケツに10kg以上入れるとのこと、宮古ではかなり濃い染液を作って染めることがわかった。さらに十二分に発酵するまでゆっくり時間をかけることで藍の色艶が増すことや、台風が来ると藍の発酵が進みやすいなど、新しい知見もいろいろと学ぶことができ大変勉強になった。

おわりに

宮古島での総合調査として藍染料の利用状況について聞き取り調査を実施したが、今回は前回にもましてさまざまな発見をした調査であった。とくに製藍や藍建ての工程については各々やり方には若干違いがあるものの濃い藍色に染めあげるための努力や工夫があることを実感して、藍染めの奥深さを再確認することができた。さらにインド藍や苧麻畑、藍建ての作業場など実際に生産されている現場を見学できたことは、大変有意義であった。

そして何よりも印象に残ったのは、宮古上布の糸不足問題への声であった。苧麻の糸を裂いて苧麻績みする作業は根気も技能もいるもので、島内での研修生養成事業だけでは十分な糸は確保できない状況にある。その背景には、昔から苧麻績みしていた熟練者が高齢化したことや、若い世代は子育て等で一定の収入が見込めないと続けられないこと等の課題があるという。

紺締め職人の下地氏が発した「宮古が今一番必要なのは糸なんだ」「宮古上布はいろんな工程が順調にできなければつまずく。後継していくのも難しい。でも宮古の文化だから本当になくしてはいけな

だ」という言葉が脳裏に残っている。苧麻糸の増産を目的とした新しい方策が始動してこの問題を解決し、宮古上布の伝統を守り続けられながら発展していくことを切に願うばかりである。

最後に、今回の調査でお世話になった砂川恵美子氏、下里愛子氏、浦崎美由希氏、岩本大輔氏、神里佐千子氏、新里玲子氏、下地達雄氏（調査順）ほか宮古島市伝統工芸センターの皆様にご心から感謝申し上げます。

参考資料

- ・沖縄県『沖縄県統計書』大正10年～昭和15年
- ・沖縄県総務部宮古事務所，2021，『宮古概観 令和2年度版』沖縄県
- ・平良市史編さん委員会，1981，「與世山親方宮古島規模帳」『平良市史 第三巻資料編1 前近代』平良市役所
- ・平良市史編さん委員会，2005，『平良市史 第十巻資料編9（戦後新聞集成下）』平良市教育委員会
- ・球陽研究会，1974，『球陽 読み下し編』角川書店
- ・小橋川順市，2004，『沖縄 島々の藍と染色』染織と生活社
- ・宮古上布保持団体事務局，2010，『宮古上布～その手技～』宮古上布保持団体
- ・沖縄大百科事典刊行事務局，1983，『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
- ・沖縄県商工労働部ものづくり振興課，2025，「令和6年度工芸産業振興施策の概要」沖縄県

¹ 『沖縄大百科事典』の「宮古上布」を参照。

² 『沖縄県統計書』には「宮古上布」という表記は大正15年からで、それ以前は「縞紺其他ノ着尺麻布」という項目の統計によると、大正13年には18,702反の最大値を示している。

³ 『宮古概観 令和2年度版』によると、平成2年は213反、令和元年には8反となっている。

⁴ 『球陽』には暴風で織布小屋、積麻小屋、染藍小屋等に被害が出たことや、苧藍を百姓に植えさせ衣服の用に備えたこと等に対し褒嘉したことなどが記されている。

⁵ 平良市史編さん委員会，2005，『平良市史 第十巻資料編9（戦後新聞集成下）』p163より引用。

⁶ 『沖縄県統計書』大正11年に宮古に葉藍と製藍の生産高が初めて記され、昭和2年の製藍の項には、泥藍と分けて葉と藍玉の数値が示されている。